

高校教師が知りたい！ 進路指導改革おさえておきたい7つのステップ 進路講演会の再構築と予備校との連携を実現した高校の進路指導改革

こんにちは！編集部です。

岡本先生から高校の進路指導のポイントについて聞く今回のシリーズ。今回は進路指導改革を進める上でのポイントをお聞きしましたが、2回目となる今回は、これまで実際に行ってきた進路指導の取り組みについてお伝えします。

実現が難しいと考えられる取り組みを次々と実現できた背景には、何が隠されていたのでしょうか？

高校の進路講演会に必要なのはゴールの明確化

－ 進路指導の手法として多くの学校で行なわれている「進路講演会」。しかし、「本当にこれが生徒のためになっているのだろうか？」「毎年同じパターンでいいのかな...」などと悩んでいる先生の声も耳にします。このような悩みをどう解決したらよいのでしょうか？

岡本 「進路講演会」は、現在では多くの学校で生徒の学習や進路意識に効果があると見込まれて開催されていますよね。中には、毎月開催している学校もあると聞いていますが、講師の選び方には多くの先生が頭を悩まされているのではないのでしょうか。

講師選定が難航する原因のひとつには、目的が曖昧になっていることが挙げられます。

進路講演会の目的とは何でしょう？ 成績を上げること、受験のモチベーションを上げること、生活習慣を身につけさせることなど、色々あると思います。その全てを網羅しなければいけないと思うと、取り組みがパンクし、何を伝えたいのかわからない企画になってしまいます。

－ 確かに、「キャリアへの理解を深めたい」「学習に前向きにさせたい」「グローバルな視点を育みたい」など、つい色々な学びを盛り込みたくなってしまっているものですね。

岡本 あれもこれもと、詰め込もうとする必要はないんです。たくさんの要素を望むと、生徒にとっては、効果の薄い講演会となってしまいます。

進路講演会の基本的な目的は次の3点であると私は考えています。

<1> 生徒に高校生活を見直すきっかけとさせる

<2> 「あんな人になりたい！」や「自分にはこんな生き方はできない。では、自分は何をすべきか？」など自分に引きつけて感じてもらう

<3> 地域や社会の中でどういう大人になりたいかを考えさせる

これら3つの目的を押さえた上で、さらに目的を絞り込んでいきましょう。絞り込むほど、生徒に刺さりやすい企画になっていきます。

目的の明確化が進路講演会の成否を分ける

－ 目標を絞る重要性は理解できますが、「もっと大事なものがあるのではないか？」など、ほかの先生から反

対の声があがることはありませんか？

はい、シャープな企画になればその分、反対意見も増えてきます。私の経験をお話します。

岡本 私は過去に、ピーター・フランクル氏や秋山仁氏をお呼びしました。いずれも著名な数学者です。おふたりを呼ぶことを提案すると、「なぜ数学だけの講演を全校生徒に実施するのか」という反発がありました。ほかにも教科はありますからね。そうした反発は想定されていました。

ただ、私には数学者を講師にした明確な理由があったんです。

当時赴任していた高校では、国立大を志望していた生徒が、数学に苦手意識を持つばかりに、私大受験に流れてしまうケースが頻発していたんです。ですから、私は「数学を捨てないようにする」ことを目的とし、目的に合う講師を選びました。講演会を実施してみると、結果は大成功でした。

今でも、秋山仁先生が講演会で言われた言葉が忘れられません。

「僕はこの年になってやっと数学が少しわかってきた。だから君たちも、高校1、2年間で数学ができなかったからといて諦めるな」

この言葉は生徒に響きましたね。何十年も数学を生業にしてきた著名な数学者の言葉ですから、生徒たちも勇気をもらえたと思います。講演後には校長室で生徒に秋山先生と直接話をできる場も設けましたし、生徒にとって学びの多い講演会になったと思います。その後は、数学を諦めようとする生徒がいたら、秋山先生の言葉を持ち出すと生徒のやる気が戻ってきたりしました。

－ 進路講演会の後に、感想を書かせているというお取り組みは聞いたことがあります。しかし、正直日常的な声掛けにまで利用することは少ないのではないのでしょうか。

岡本 そうですね、講演会をただ開くのではなく、後から振り返りの機会を作ることも大切なことです。確かに講演後のアンケートや感想を書かせる学校が多いようですが、たとえば半年後に、総合的な学習の時間などでアクティブ・ラーニングをし、「講演会の内容をいかに活かしているか」を考えてもらうというのもよいかもしれません。ちなみに、講師を選ぶときには、前回の記事でもお話したとおり、まずは先生自身が「話を聞いてみたい」と思える人を選ぶべきです。とはいえ、独りよがりになってもいけません。

たとえ著名な講師でも、高校生相手だとうまくいかないケースもありますから、事前にしっかりリサーチをします。生徒の成績などの特性も加味して目的を明確にし、最適な講師を選んでいきましょう。

予備校の力を取り入れるべき？ 「教科指導×進路指導」で、学校教育を捉え直す

私が行った進路指導改革で反対意見が多かったものとして、「予備校講師など外部機関の活用」があります。先生の中には、「予備校と学校は別物！」との考えを持つ方もたくさんいます。

－ 教科の専門性が高い高校の先生ですから、予備校と連携することへの反発も多いかと予測できます。どうして自分の授業だけでは足りないんだと、プライドが傷ついてしまう先生まで出てしまうのではないですか？

岡本 私は予備校と学校は別物だからこそタッグを組むメリットがあると思っています。

予備校の先生は、受験という一つの目標に向かって徹底的に腕を磨いています。ある予備校の先生にお聞き

したところ、年間200問以上の受験問題を研究しているそうです。学校行事や部活動、生徒指導など多くの業務を抱える高校教師には、このように受験対策だけに特化することは難しい。特に難関大学の入試ともなると、最近では問題そのものに問題があって（笑）、予備校の先生の指摘で大学側がミスを認めるといったことが何度も起きています。

－ 学校の先生は、進路指導、教科指導だけでなく、生徒指導や部活動などもあり、受験指導だけに特化することは難しいということですか？

岡本 はい。受験に向けた5教科7科目指導という視点で見れば、予備校とはレベルが明らかに違ってきます。そこで私は生徒の進路実現のために予備校の力を借りない手はないと考えました。

11月の祝日に主要3教科英語・国語・数学の補習で、都立高校で初めて予備校の先生に教壇に立って授業をしてもらいました。結局生徒が100人以上、休日にもかかわらず集まりました。テレビに出るような有名予備校講師に来たもらったので、生徒からも好評で、モチベーションアップにつながることができました。

－ しかし、予備校の先生が慈善事業で学校に来てくれるわけではありませんよね？

岡本 はい、費用は問題となりました。生徒からお金を取るとすると、参加したいのにできない子が出てしまう可能性があります。先生方の反対も大きくなるでしょう。そこで、私自ら予備校と交渉し大幅にまけてもらいましたが、さすがにタダにはくれませんでした。

そこで頼ったのが後援会とPTAでした。その学校には後援会があり、毎年数百万円が集まっていました。それを知っていたので、「生徒のために援助してほしい」と伝え、PTAと折半してその資金を提供していただきました。「生徒からお金が取れないから無理」と思考停止させずに、実現できる方法を考え抜いた結果です。

もうひとつ、予備校の力を高校に取り入れたこともあります。それが「サテライト授業」です。予備校の授業を動画で遠隔受講するものですね。もう10年以上前になるんですが、部活動の練習で勉強時間が取れない生徒に向けて、午後5時半からビデオを使ったサテライト授業を企画したんです。これなら、部活終了後予備校へ行かず学校で予備校の授業が受けられます。料金は1回90分で500円としました。

－ 前例がない企画に対しては反対意見が出たのではないですか？

事前に生徒から取ったアンケートでは希望者が多く、この結果を持って職員会議にはかりました。この頃はさらに学校の先生の予備校に対する反発も強い時期。当然のように「高校は予備校とは違う」という意見が出ました。

そこで、「予備校に行く必要はない。予備がダメと言うのなら、先生が放課後に補習してくれますか？」と聞くと、それ以上反対意見は出ませんでした(笑)。

さきほどの進路講演会と同じように、サテライト授業でも目的をできるだけ明確にしました。私が設定したのは、次の条件です。

- ・国公立大志望を諦めてしまわぬように、理系科目に重点を置く
- ・センター試験60点のレベルの子を80点のレベルにする

目的に合う授業を選定し実施した結果、生徒からも好評で、野球部でしたがサテライト授業の後に自主的に教室に残って部活のメンバーと一緒に復習している場面も見られました。これこそアクティブ・ラーニングですよ

。

私がサテライト授業を取り入れた頃は、まだインターネットも学校では使えませんでした。現在はさまざまなアプリや動画サイトもあります。選別するのには必要はありますが、さまざまなツールを使える環境は整ってきているといえるでしょう。

生徒への教育を学校教師だけで担うのではなく、進路講演会や予備校の活用など、ときには外部の力も取り入れていくことで、より質の高い進路指導を行うことができるといえるでしょう。

【今回お話を聞いた岡本眞一郎先生は、東京都と埼玉県の公立進学校5校での勤務経験のある50代のベテラン教諭。英語科。これまでに進路指導改革を、自身の工夫と努力により実現してきた。】